

## 【研究主題】地域の伝統「小沼箒」を守り、受け継ぐために

### 【副題】～児童が主体的に学ぶ探求学習を目指して～

【学校・団体名】長野県飯山市立常盤小学校

【役職名・氏名】教諭 前澤 大介

#### 1. 研究のねらい

##### (1) 伝統的工芸品「小沼箒」

飯山市の常盤地区は古くから水田地帯が広がり、その中に小沼集落がある。「小沼箒」は小沼集落で明治初年頃から生産され、冬期間の豪雪地帯の副業として重要な地位を占めてきた。最盛期は昭和20年代から30年代で、箒小屋と呼ばれる共同作業所が10数箇所あり、ひと冬に3万本以上を生産した。しかし、社会の変化により生産数が減少し、平成30年1月には生産の中心であった小沼箒生産組合が解散した。その後、小沼箒を継承する気運が高まり、平成30年5月に「小沼ほうきを守る会」が発足し、8月に団体名を「小沼ほうき振興会」に変更した。そして、伝統的に受け継がれてきた手作業による品質の高さも評価され、平成31年3月に長野県伝統的工芸品に指定された。



【竹かんざしで強度を増す箒】



【柄は芸術性を高めたデザイン】

##### (2) 目指す児童の姿

児童が暮らす常盤地区で伝統的に生産されてきた「小沼箒」が、長い歴史の中で地域や学校、家庭で愛用されてきたことや、高い品質から長野県の伝統的工芸品に指定されていること、そして、現在でも身近に暮らす方々が継承に努めている事実との出会いを通して、「小沼箒」をこれからも残していきたいという文化継承への願いをもって活動を行う姿を願った。また、その為に自分達にできることについて、様々な見方や考え方を働かせながら主体的に探求していく姿を期待して、本テーマを設定した。さらに、「小沼箒」を通して、社会や理科など各教科を横断的に学ぶことに繋がり、私たちが暮らす常盤という地域の特色を知ることによって愛郷心を更に育むことを目指した。

#### 2. 研究の経過と内容

##### (1) “知らなかった”「小沼箒」との出会い

令和4年度の4月、4年生だった児童と総合的な学習の時間のテーマについて話し合った際に、「小沼箒」の実物を提示した。聞いたことがあっても、実物をよく知らない児童は、地域で生産されている「小沼箒」に関心を寄せていった。そして、日常的に清掃で使用している箒との違いを考察するために実際に使用してみた。「いつもの箒よりかたい気がする。」「掃き心地がいい。」「教室の隅もきれいに掃ける気がする。」使用して感じたことや気付いたことを共有し、小沼箒が長野県の伝統的工芸品に指定されていることや、生産者が減っており、将来無くなってしまふかもしれないことを伝えた。すると児童からは、「無くなってほしくない」「他の箒と何が違うのか、もっと小沼箒を知りたい。」「僕たちも作ってみたい」といった発言があり、学習のテーマを「常盤の小沼ほうきを守ろう」と設定し、探求学習が始まった。



【小沼箒を手取る児童】

##### (2) ホウキモロコシの栽培

まずは、小沼箒を知る為に作り方を調べることから始めた。材料はイネ科のホウキモロコシだと知り、その種の入手を試みた。しかし、購入できる物が見つからず、ようやく見つけた種はわずか12gだった。児童とこの種を育てて箒にすることを目標にして、小沼ほうき振興会（以下、振興会）会長の鈴木さんにご指導をお願いした。

6月、鈴木さん他2名の振興会の方が来校し、学校の畑に種蒔きを行った。この時、鈴木さんが多くの種をご準備してくださったので、畑いっぱい種蒔きをすることができた。



【種蒔き機を使つての作業】

鈴木さんからは、真っ直ぐに伸びた強いホウキモロコシを育てることが重要になるので、種も一箇所に固まらないように間隔を空ける事や、土の被せ方など細かい工夫が大切だと教えていただいた。

作業を終え、教室で振興会の方々に小沼箒について教えていただいた。

- ・しっかりとしたホウキモロコシを育てることで、芯がありしなやかな箒になる。
  - ・良いホウキモロコシは茎が太くて使用していても切れたり折れたりしない為、長年使用できる。
  - ・一般的な箒との違いは、箒の根元付近に「かんざし」と呼ばれる竹を刺すことで強度を強くし、壊れにくく、掃きやすい箒になる。
  - ・ホウキモロコシを束ねる糸を巻く力加減が非常に難しい。緩くては箒として使えない。
  - ・玉(※)の数が増えるほど、形を整えるのが難しい。小沼箒としての品質にならないため、振興会でも作れる人があまりいない。
- ※ホウキモロコシの束。15本で1玉にする。立ち箒は5玉から13玉を組み合わせでできている。

小沼箒の特色について聞き取りを行うことで、児童は小沼箒を作ることの難しさや、長野県伝統的工芸品としての品質を維持するために日々努力している振興会の方々の思いを学んだ。



夏休みが明け、畑には児童の背丈を超えるホウキモロコシが育っていた。ホウキモロコシの先端には新しい種が実っており、児童はとても嬉しそうに観察していた。そして9月、振興会の方々と収穫と脱穀を行った。収穫は節の部分から簡単に折ることができ、児童はすぐにコツをつかんで作業を進め、収穫したホウキモロコシの束を手で喜んでいた。そして、足踏み脱穀機で脱穀を行うと、なじみのある箒の穂先になった。中には穂先が曲がっ



たままになっているものもあり、これは、種が実って穂先が垂れ下がった状態のまま長い時間が経過したことが原因だと分かった。そこから児童は収穫のタイミングがとても重要だと学んだ。その後、収穫したホウキモロコシを丈夫にするために風通しの良い場所で乾燥させた。

### (3)小沼箒の発信〜NHK「給食ラジオ」〜

11月、長野市社会科見学でNHK長野放送局の見学を計画すると、

「給食ラジオ」の番組紹介と小沼箒の紹介を含めて出演の誘いがきた。



「小沼箒のことを色々な人に知ってもらえるからいい」と、前向きな反応の児童達に対して、「知ってもらおうとどんな事がいいの」と問いかけてみた。すると、「たくさんの人に買ってもらえる。」「買ってもらえれば、作る人もうれしい。」「買ってくれる人が増えれば、作りたいって思う人も増えると思う」「たくさんの人に小沼箒を知ってもらって、使ってほしい。」と意見が付き、「常盤の小沼ほうきを守る＝多くの人に知ってもらおう」という新たな視点が生まれた。

収録は、長野市社会科見学の当日にNHK長野放送局で行った。飯山市の紹介、常盤小学校の紹介、小沼箒の紹介を行い、小沼箒を担当した児童は全員から意見を集めながら紹介する原稿を完成させていた。

### (4)「小沼箒」作り

1月になり、いよいよ箒作りを行う。事前に鈴木さんに小沼公民館で準備をさせていただき活動を行った。鈴木さんの手本を見ながら、ホウキモロコシの穂を糸で束ねて玉を作り、穂を交互に前後させながら糸を編み込んでいく。束ねる作業も、糸を編み込んでいく作業も糸を張りながら進めていく為、力加減がとても難しい。大人ほど力が無い児童は、全身を使って糸で締めたり、失敗をしたりしながらホウキモロコシを束ね、編み込んで組み上げていた。最後に、箒の形をハサミや包丁で整え、自分の「一玉の手箒」が完成した。この活動後、児童達は次のように振り返った。



- ・糸でしっかりとしめないと、ほうきがゆるくなってしまった。力がいると思った。
- ・編んでいく時に、鈴木さんみたいに同じ間かくできれいにできなかった。
- ・作ってみて「もっとこうすればよかった」と思う所があった。また作りたい。
- ・今日は一玉を作るのにとっても大変だった。玉をたくさん組み合わせたほうきがすごいと思った。
- ・鈴木さんでも失っばいが多いと言っていたから、売れるほうきにするのは本当に難しいと思った。

### (5)多くの人に伝えたい～ふるさと CM 大賞参加～

5年生の4月、児童から「小沼箒の学習を続けたい。」という願いが出た。児童からは「また箒を作りたい。前回よりもっといいのが作れると思う。」「またホウキモロコシを育てよう」「去年は鈴木さんに教えてもらったから、今年は自分達でもできるかも」といった意見が出た。加えて、「小沼箒を守るために、たくさんの人に知ってもらいたい。」という意見が出た。この意見は、前年度の「給食ラジオ」から繋がってきた思いである。これらの児童の姿は、主体的で探求的な学びの姿と言えるのではないだろうか。

多くの人に知ってもらう為にはどうすれば良いかを話し合った。チラシを作る、動画を作るという意見から、学校の近くにある「道の駅花の駅千曲川」に県内外から多くの観光客が訪れるので、そこでチラシを配付すれば県外の方々にも知ってもらえる。動画はYouTubeなら世界中の人にも見ってもらえるといった意見が出され、より多くの人に小沼箒を発信する方法を模索していった。そして数日後、保護者から「動画を作って『ふるさと CM 大賞』に出品してみたらどうか」という提案から、発信する活動内容が決定した。

飯山市役所の支援の下で、CM 作りを毎年行っている団体が「ちいむこまあしやる」だった。サポートをしていただくために、飯山市役所で打合せ会議が行われ、「ちいむこまあしやる」の方から CM 制作にかける思いを覚えていただいた。その思いを翌日児童に伝え、様々な方々の思いを大切にしながら CM 作りをしようと、最初の目標を次の三点にした。

- ①小沼ほうき振興会の皆さんの思いを大切にす。
- ②ちいむこまあしやるの皆さんの思いを大切にす。
- ③学んできた小沼箒の特徴をわかりやすく伝える。

後日、振興会、ちいむこまあしやるの方々に来校し

ていただき、児童と打合せ会を行い、それぞれの団体の願いや思い、助言を話していただいた。

#### 【 小沼ほうき振興会 】

- ・長野県の伝統的工芸品に指定されたこともあるが、昔から身近だった箒が無くならないよう、一生懸命に頑張っている。
- ・自分にもできることをとと思って参加している。掃除機とは違う、箒の良さを伝えてほしい。
- ・子ども達が一生懸命に勉強してくれているのが嬉しい。CM の内容は子ども達に任せたい。

#### 【 ちいむこまあしやる 】

- ・毎年最優秀賞を目指している。最終審査会に残るハードルがとても高い。
- ・思い出作りという気持ちでは良い結果にならない。多くの人に見てもらいたければ、それなりの作品を作らないといけない。
- ・伝えたいテーマを絞っていくことが大切。見る人の印象に残るものが良い。過去に作られた作品に類似しない、新しい発想が必要。

願いや助言を聞いた後、CM のテーマについて話し合いをくり返したが、伝えたい内容が多くて、しぼるのが難しかった。さらにそれを、印象に残る作品にするイメージが浮かばない様子だった。そのため、児童は過去の受賞作品を何本も観る事で、CM へのイメージを作ることにした。その結果、K 児は「小沼箒をより身近に感じられるように、家の部屋（和室）の中で撮影をしたらどうか」、N 児は「掃除機とは違う良さを伝えるために、たくさん種類があって使い分けられる良さを伝えたらどうか」と提案した。そして、話し合いは「たくさんのお沼箒が登場する」「小沼箒が、掃除機ではできない場所をしゃべりながら掃除をする」「しゃべるなら、本当にしゃべっている口を合成できないか」と進んでいった。



夏休み中、ちいむこまあしやる、市役所、ケーブルテレビの方に来ていただき、児童が考えた CM 内容を説明し、その映像化への助言をいただいた。そして、口を合成する編集方法（ク



ロマキー)も学んだ。いよいよCM制作がスタートし、イメージを具体的な形にしていって。

K児の「家の部屋で撮影をしたい」という意見について、「神仏の鷲森」から場所を提供していただけることになった。「神仏の鷲森」は長野県伝統的工芸品の飯山仏壇を製造販売している老舗店であり、児童が想像

していた和室のイメージに最適だった。但し、撮影時間は一時間程度であり、その中で計画している撮影内容を完了しなくてはいけない。また、撮影日が作品提出締め切り日の直前だったこともあり、日を改めて撮影し直す事ができないので、撮影した映像はその場で確認、編集、修正しなくてはいけなかった。それを達成



する為に、撮影当日まで撮影、編集作業を同時に行いながら、短時間でCMを作る練習を繰り返した。結果、撮影当日は計画通りに撮影と編集作業を行うことができた。完成した作品に児童は「どこでもませて！小沼ほうき」とタイトルをつけた。

### (6) 「ふるさとCM大賞」最終審査会へ

11月1日、長野朝日放送から「最終審査会のご案内」が届き、児童が制作したCMが72作品中18作品の中に選ばれた事を知った。自分達で内容を考え、撮影から編集まで行った作品だったので達成感が大きかった。

最終審査会は、作品の紹介(映像)、ステージパフォーマンス、インタビューという流れで発表を行う。CMでは様々な小沼箒が登場し、しゃべりながらその利便性を伝える内容だったので、そこで伝えられなかった事(生産者が減っている事や、守りたいという思い、自分達も箒作りに関わってきたこと)をステージパフォーマンスで表現する事になった。

最終審査会の準備と同時進行で二回目の箒作りを行った。今回は二玉を組み合わせる手箒に挑戦した。玉と玉を組み合わせる編み込



む技術を応用することで、複数の玉を組み合わせ、座敷箒や立ち箒に発展させることができる。児童達は前回の反省から、束を糸で強く締めて丈夫にしたり、等

間隔に編み込みをしたりと、丁寧に作業を進めたりしていた。そして、完成した手箒を持って最終審査会でパフォーマンスを行うことにした。

ふるさとCM大賞最終審査会当日朝、バスの中でちいむこまあしやるの方が児童に「今日の目標は何ですか。」と尋ねた。児童はすぐに「小沼箒をたくさんの人に知ってもらうことです。」と答えた。この目標の為にこれまで取り組んできた事を再確認した瞬間だった。



本番で児童は「小沼箒は掃きやすい」「作る人が減っているんだって」「小沼箒を守りたい」とステージ上でパフォーマンスを行い、その後の司会者の質問にも堂々と答えた。発表後、最終審査結果が出るまでの間、児童は振興会の方々と飯山市のブースで小沼箒の魅力を伝えながら宣伝、販売を行った。これまで取り組んできた「小沼ほうきを守る＝多くの人に知ってもらう」という活動を主体的に行う姿だった。その後、最終審査結果が発表され、特別賞(ユーモア賞・技術賞・産業伝承賞)を受賞した。



### 3. 研究の成果とまとめ

この学習の成果は、児童が「小沼ほうきを守るために、何ができるか」を課題として追究を続け、常に主体的に活動を進めたことだと感じる。受け身になりがちな総合的な学習の時間が、一年目は自ら箒作りを学び、二年目は小沼箒をどのように発信していくかを児童達の見方や考え方を働かせながら考えた。そして、一つひとつの活動のステップを進みながら、探求活動がスパイラルとなって繋がっていった。このような学びを進めてきた児童は、「私達の小沼ほうき」という意識をもつようになり、その発信を行うために、今年は修学旅行で訪れた両国国技館に小沼箒を贈呈する活動を行った。このような学習が、児童のこれからの生活に生き続け、地域の社会参画につながるのだと私は考える。これからも、児童の中に生きる学びが行えるよう、研鑽を積みたい。